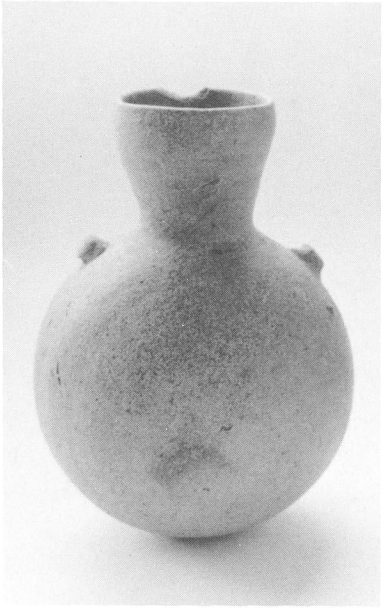
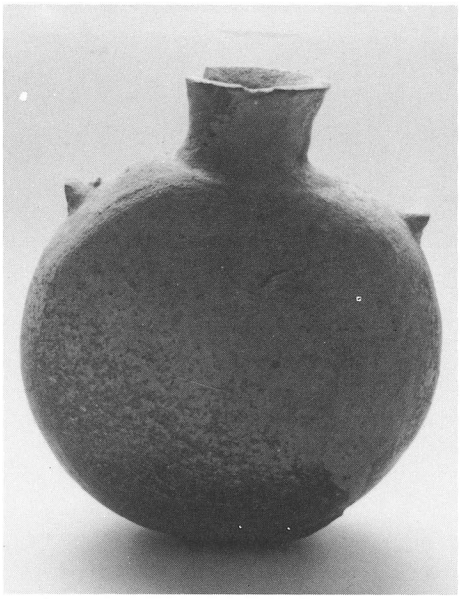
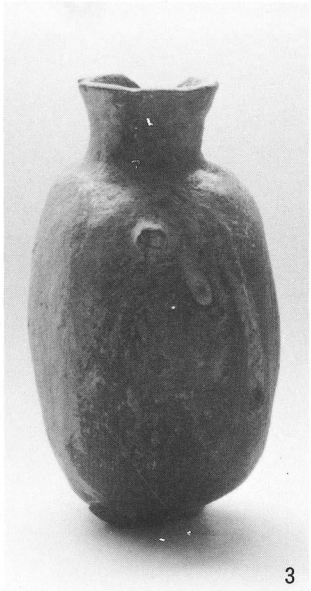
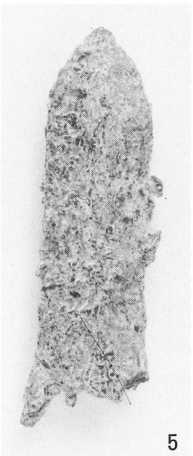
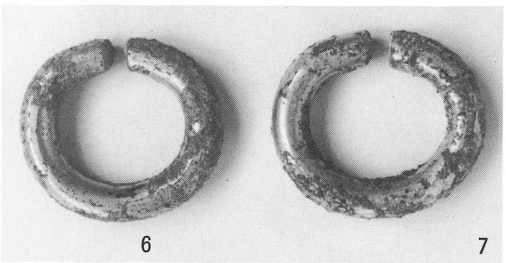
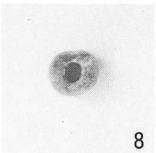







1　須恵器高杯
2　須恵器提瓶
3　須恵器提瓶
4　土師器壺
5　鉄　鏃
6　耳　環
7　耳　環
8　滑石製臼玉

岡宮古墳出土遺物

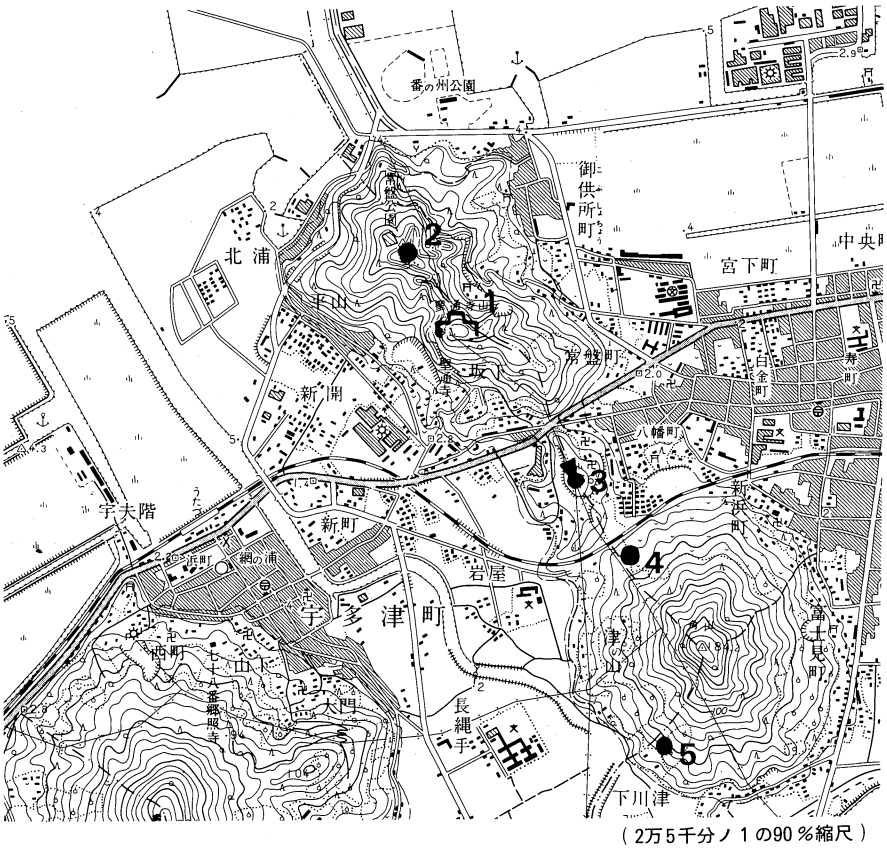
# Ⅳ　聖通寺城跡

## 第1章　はじめに

昭和51年以来実施してきた瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の一環として，昭和59年12月13日～翌60年1月28日迄の間，聖通寺山東側斜面の埋蔵文化財予備調査を実施した（第1～第5トレンチ）。この調査に先立ち，昭和59年11月5日～20日迄の期間聖通寺山中峰北側平坦部では，テレビアンテナ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を行った（第6トレンチ）。いずれも中世山城として知られる聖通寺城跡に関する遺構・遺物の検出を当初の目的としたものである。

予備調査の結果，第4トレンチからの遺物の出土量が他の調査区に比べ多いこと，また登山道を隔てた上位の屋根に平坦面が認められることから再調査の必要ありとの結論を得，昭和60年4月10日～同年5月8日迄の期間本調査を実施した（第7～10トレンチ）。

道路予定地及びテレビアンテナ建設予定地の調査対象面積は，1300㎡である。




（2万5千分ノ1の90％縮尺）

第1図　遺跡の位置

# 第2章　立地と環境

聖通寺城跡は，坂出市御供所町と宇多津町平山にまたがる聖通寺山に位置し，奈良氏の依った中世山城と伝えられている。[註1]

聖通寺山は，南北に長く北峰（116.7m）・中峰（115.1m）・南峰（98.6m）の各峰からなり，北峰と中峰の間はかなり大きな鞍部をなし，中峰から南峰へは比較的なだらかな斜面を形成している。

本丸跡は，中峰に位置すると考えられており，頂部は約35m×30mの平坦部があり東方に向かって3段の平坦部が続く。

県下における中世山城としては，大川郡の雨滝山に位置する雨滝城跡，高松市西郊の五色台山系東端の勝賀山に位置する勝賀城跡，丸亀平野の北西部を限る弥谷山山系の一つ天霧山に位置する天霧城跡等の調査が知られている。

聖通寺城跡については，坂出市の川畑迪氏が昭和20年代より踏査を行っておられ，その一部が明らかとなっているが，北峰頂部を中心とした観光開発により山容の改変が著しく，旧状を伺い知ることが困難な状況にある。

# 第3章　調査の方法と成果

## 1．調査の方法（第2図）

調査は道路予定地内で，郭等の施設の遺存の考えられる尾根を調査区に選定し，トレンチ調査を実施した。

トレンチはすべて花崗岩の岩盤まで精査し，遺構の検出に務めた。以下各トレンチの調査概要を順次説明する。

第1トレンチ（2×12m）

北峰より北々東及び北東に派生する2つの尾根に挟まれた谷近くの，標高31～35mを測る位置に約4mの比高差をもつ2つの平坦面を断ち割る形で設定した。

平坦面の土層は大きく4つに分かれる。第Ⅰ層は，暗灰褐色を呈する表土層で層厚5～10cmを測る。第Ⅱ層は層厚20～30cmの黄褐色土層で軟質である。第Ⅱ層の下位の山側部分では水平に削平された基盤の花崗岩であるが，谷側部分では1～10cmの旧表土層と考えられる灰褐色土層を挟んで岩盤上に第Ⅲ層の硬い黄土色バイラン土がのる。

礎石・柱穴等遺構は，検出されなかった。

遺物は，約200点検出されたがいずれも小破片で，旧表土層までは土師質土器片に加えて近・現代の瓦片や染付片が混在している。第Ⅲ層からの出土遺物は，数片を除いてほとんど中世と考えられる。器種としては，土師質の小皿・椀・摺鉢・羽釜・蛸壺・青磁片等である。

第2トレンチ（2×20m）

第1トレンチの南側の尾根の標高50～57mに設定した。この下方の尾根には，平坦面が認められる。堆積土はほとんど認められず，流失したものと考えられ表土を除くと直ちに花崗岩の基盤が現れる。

遺構遺物は，検出されなかった。

第3トレンチ（2×35m）

北峰のやや南よりから派生する尾根の標高44～52mに設定した。トレンチにかかる3段の平坦面をはじめ，東から南にかけての下方斜面には幾段もの平坦面があり標高35mあたりより下位では，現在畑地として利用されている。トレンチにかかる3段の平坦面は，第1トレンチで認められたものと同様山側の岩盤を削平し，谷側に盛土することにより形成されている。

礎石・柱穴等遺構は，検出されなかった。遺物の出土状態は，第1トレンチと同様で土師質土器片を主体に小破片が約300点出土した。

第4トレンチ

（2×30m）

第3トレンチの南側の尾根の標高41～52mを測る位置に，比較差約4.5mの2段の平坦面を断ち割る形で設けた。トレンチの下方にも平坦面が連なっている。土層は，平坦面と斜面では異なり斜面では堆積土は少なく，第Ⅰ層表土（暗灰褐色土）が5～10cm，第Ⅱ層軟質の黄褐色土層が10～20cm堆積しておりすぐ下位で基盤の花崗岩に達する。平坦面では，第Ⅱ層と，山側部分を削平された岩盤の間に，第Ⅲ層の硬い黄土色花崗岩バイラン土層があり，最も厚い平坦面の肩部で90cm程を測る。

遺構は検出されなかった。

遺物の出土状態は，第1・3トレンチと同様で土師質土器片を主に，小破片が約670点出土した。そのうち約500点は第Ⅲ層に含まれ，土師質の小皿・土鍋・羽釜・摺鉢・

第2図　トレンチ配置図

山茶椀状の底部・蛸壺片・備前焼片・青磁片等が出土した。

第５トレンチ（２×20m）

南峰から南東に派生する尾根の東側山腹，標高43～47mを測る位置に設定した。トレンチ周辺には，階段状に平坦面が認められ，一部は現在畑地となっている。トレンチにかかる３段の平坦面は各々約1.5mの比高差を持つ。

土層は，基本的に第３・４トレンチと同様であるが，硬い黄土色花崗岩バイラン土が薄く平坦面の肩部でも10～30cm程認められるだけである。

遺構は検出されず，遺物も僅かに近・現代の染め付け片や瓦片が検出されたのみである。

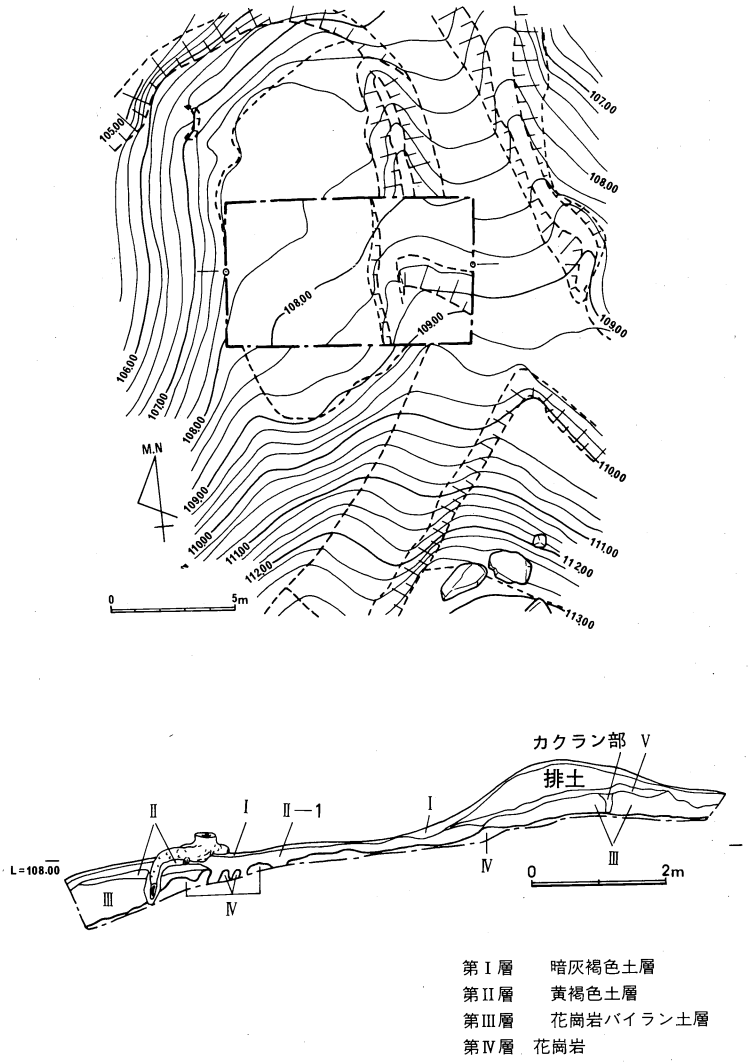
第６トレンチ（６×10m）

中峰頂部にある本丸跡（推定）に比高差約５mで北隣する平坦面に設定した。本丸跡の東側には，広さ250㎡前後の郭跡とみられる平坦面が３段あり，その一番上の平坦面と，調査区をつなぐように幅３～５m長さ約30mの細長い平坦面が認められる。

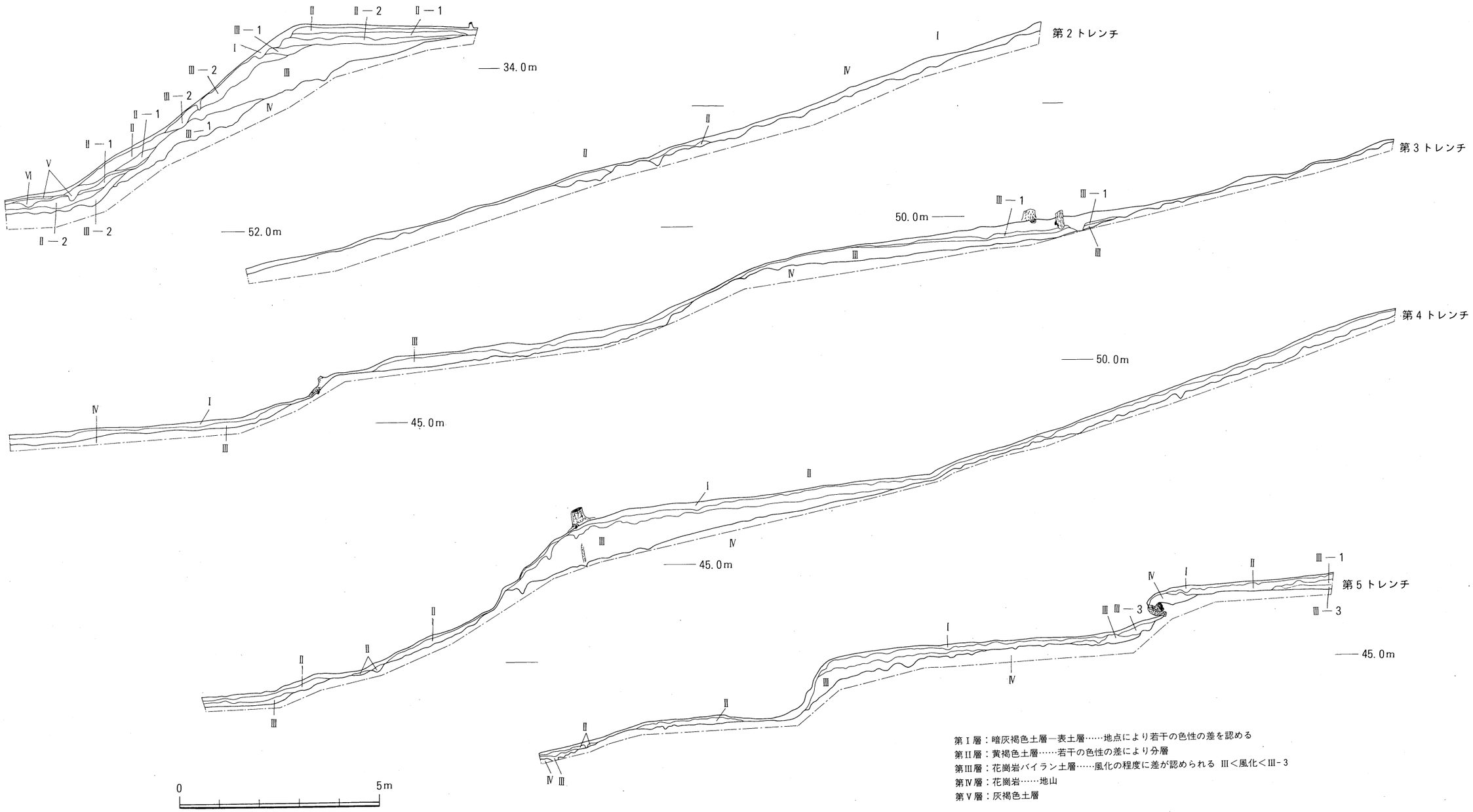
トレンチを設けた平坦面は，現状で南北約14m・東西約６mを測り，その東側には本丸跡から北へ下る幅約２mの登山道がある。この登山道に沿って土塁状の高まりがみられる。

調査の結果から，高まり部分では暗灰褐色土（表土）が５～10cm推積し下位には灰褐色土の混じる軟質の濁黄灰色土層が認められ，この層からは明治10年鋳造の一銭が検出された。その下には，旧表土層と考えられる約10cmの灰褐色土層を挟んで黄土色の花崗岩バイラン土が20～30cmあり，さらに花崗岩の基盤へ続く。

平坦部では表土層下位に軟質の黄褐色土が約20cmある。この下位は，調査区東側ではほぼ水平に削平された花崗岩の岩盤であるが，西寄りでは斜めに落ちる岩盤上に５mm以下の花崗岩粒を含む硬質の黄色土が厚く認められ，その上に炭化物の混じる約10cmの黄色土が水平に推積している。削平された岩盤と黄色土上面はほぼ同一レベルで一つの平坦面をなしている。この平坦面の東縁（トレンチの中




**第３図　第６トレンチ周辺地形測量図及び土層図**




第4図　第Ⅰ～5トレンチ土層図

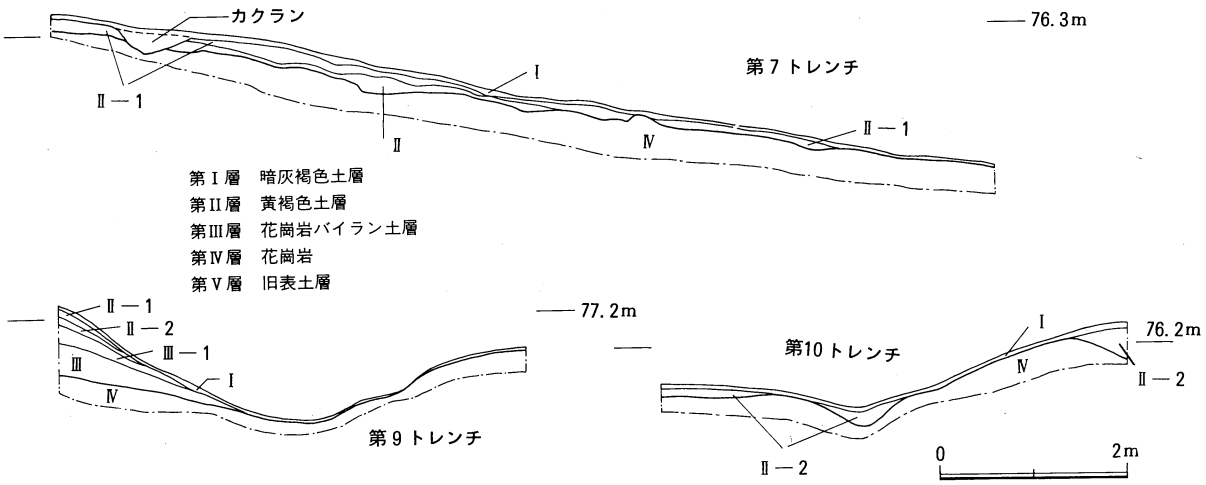
央やや東寄り）は，削平された岩盤の段差で画される。段差は，トレンチの南側で約25cm・北側で約15cmを測る。この段差より東約1mでも南北方向に長さ約2mの削平によるとみられる約10cmの岩盤の落ちがみられた。

遺物は，ほとんどが平坦部の黄褐色土層と炭の小片を含む層から検出された。その多くは瓦片で，他に銅銭・鉄器・土師質土器片が認められた。

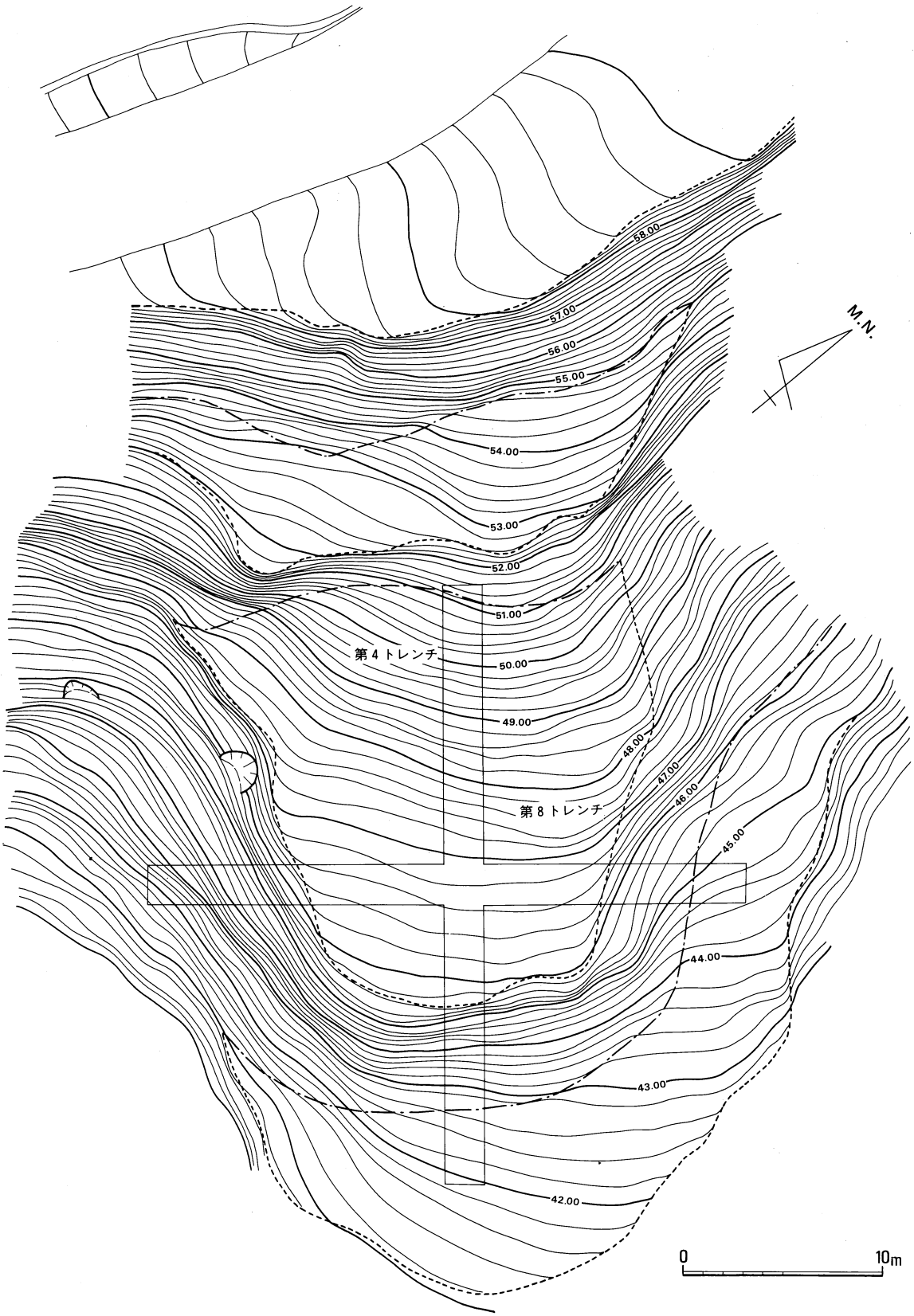
第7トレンチ（2×10m）

標高76mの北東に張り出した尾根に設けた。今回調査の行われた地区の最高位にあたり，坂出市街を一望できるところである。

表土層（腐植土約5～10cm），灰褐色土・灰黄褐色土（約10～15cm）のすぐ下で地山（花崗岩の基盤）に達し，遺物の出土は全くみられなかった。




第5図　第7・9・10トレンチ周辺地形測量及び土層図




第6図　第4・8トレンチ周辺地形測量図

第８トレンチ（２×30m）

第４トレンチでの遺物の出土状態を考慮し，直交する位置に設定した。尾根の北側には比高差約２ｍの平坦面が広がり，東へ廻り込み第４トレンチにかかる下位の平坦面へと続く。花崗岩の基盤までは，尾根の中央部で約60㎝，南側斜面側では約１ｍを測る。

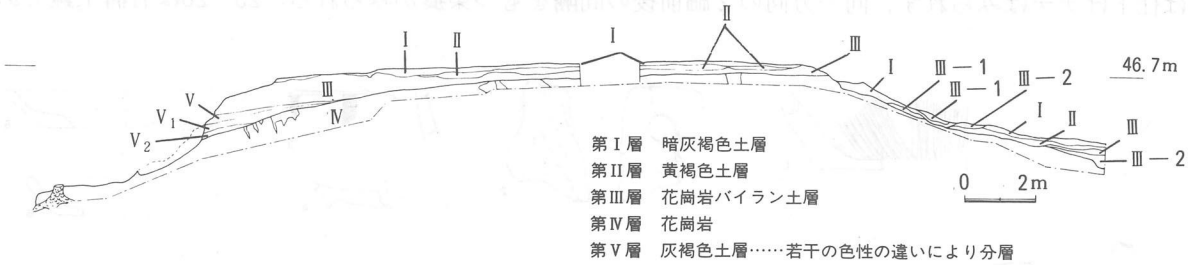
遺構は検出されなかったが，土師質土器片・青磁片・近現代の陶磁器片等，総数1073点の遺物を検出したが，いずれも小破片であった。

遺物の取り上げは層位ごとに行い，第Ⅲ層についてのみ２ｍごとの区画を設け出土傾向の把握を試みた（第８図）。その結果尾根の南側斜面よりに多く出土する傾向が認められ，また旧表土層と考えられる第Ⅴ層の下位からは，遺物は検出されなかった。

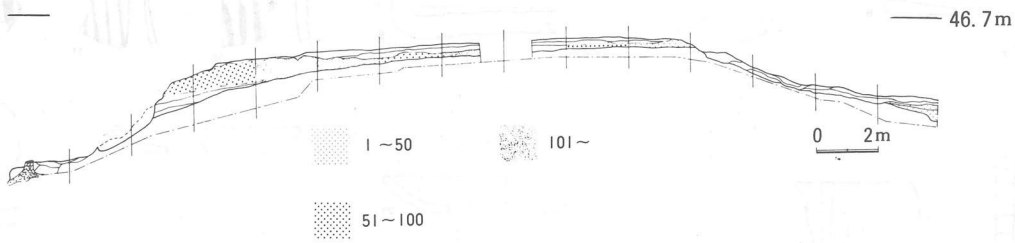
第９・10トレンチ（１×５ｍ）

尾根を切断するようにくびれている両側に平行して設定した。両トレンチとも傾斜部に堆積があったものの，第７トレンチと同様表土層を除去するとすぐ地山（花崗岩の基盤）に達する部分と，灰褐色土・灰黄褐色土の下に花崗岩バイラン土層，基盤の花崗岩がみられた。

出土遺物は全くなかった。




第７図　第８トレンチ土層図




第８図　第８トレンチ遺物出土状態概念図

# 第４章　出土遺物

第１トレンチ出土遺物（第９図１～６）

１は土師質土器の摺鉢片である。内面には条痕が認められ，胎土には１～３㎜大の石英粒を含む。２は蛸壺片である。上面に浅いくぼみがみられる。３は青磁椀の小破片である。内外面に茶緑色の釉を施したもので，外面には蓮弁が太く描かれている。明代のものと考えられる。４～６は土師質の椀及び小皿である。５・６の底部切り離しは，いずれも回転ヘラ切りである。

第３トレンチ出土遺物（第９図７・８）

7は管状土錘，8は須恵器片を利用した円盤状の土製品である。

第4トレンチ出土遺物（第9図9～14）

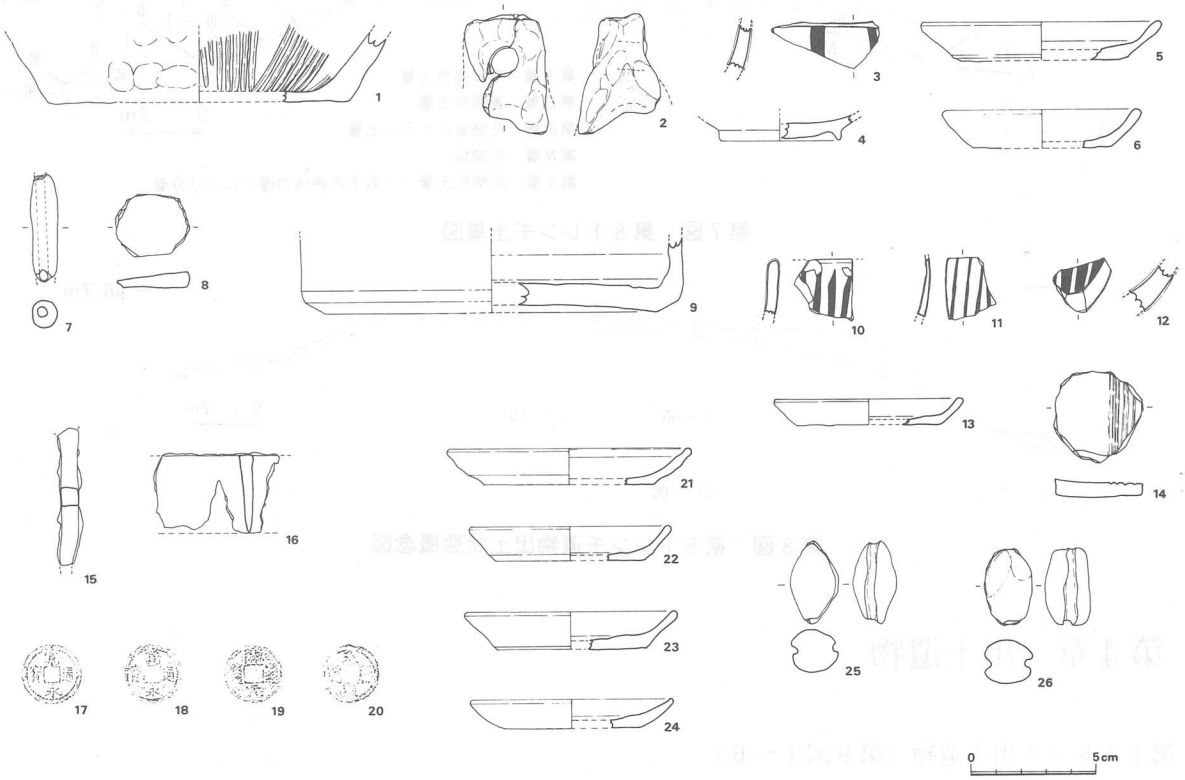
9は備前焼の壺の底部である。色調は赤紫色を呈し，焼成は堅緻である。10～12は青磁椀の小破片である。10は薄青緑色の釉が内外面に施され，外面には細い蓮弁文がある。11は薄茶緑色の釉を内外面に施し，外面には細かい蓮弁文がある。12は内外面に薄青緑色の釉が施され，内面に縦方向の文様がある。いずれも明代のものであろう。

第6トレンチ（第9図・15～20）

15は正方形の断面を持つ鉄釘である。鍛造と考えられる。現存長約5.3cmを計る。16は断面三角形をなす破片で，刀子と考えられる。17～20は銅銭で，17・18は寛永通宝（初鋳寛永年間・1624～1644），19は開元通宝（唐・武徳四年・621），20は天〇通宝と判読できる。

第8トレンチ（第9図・21～26）

21～24はいずれも土師質小皿の小破片である。底部の切り離しは回転ヘラ切りであり，23の底部には仕上げナデはみられず，同一方向の2mm前後の間隔をもつ条痕がみられる。25・26は有溝土錘である。




第9図　トレンチ出土遺物実測図

# 第５章　調査の成果と今後の課題

県下での中世山城の調査例としては，大川郡長尾町前山に所在する昼寝城跡，同郡津田町・大川町・寒川町にまたがる雨滝山に所在する雨滝城跡，高松市西郊の勝賀山に位置する勝賀城跡，丸亀平野の北西部弥谷山山系の天霧山に位置する天霧城跡等が知られている。その他，200ケ所を越えるともいわれる中世城郭跡が伝えられている。

聖通寺城跡は奈良氏の拠った中世山城と伝えられ，中峰周辺には郭状の平坦部が，また中峰から南峰にかけての西側斜面には，土塁・空堀等の遺構の存在が一部確認されているという。

今回調査を実施した東側斜面の各尾根周辺に認められる幅３～５ｍ前後の階段状の平坦面についても，当初郭状の遺構の存在が期待されたのであるが，平坦面を形成するために盛られた花崗岩バイラン土中に15～16世紀代の遺物の含まれていることが判明し，近世以降に行われた造成工事の跡であることが明らかとなった。山麓から中腹まで連続して認められる平坦面の分布状況をみると，これらの平坦面は，かつて畑地として開墾されたものと考えられる。

但し出土遺物の多くは，その時期からみて聖通寺城跡に伴う可能性があり，これらの遺物は平坦面の造成される以前から調査区周辺に存在していたものと考えられる。

これに対して第６トレンチを設定した平坦面は，中峰頂部周辺にみられる他の平坦部とともに聖通寺城の主要部を構成する郭跡と考えられていたところであり，登山道に沿って認められる土塁状の高まりが問題とされたが，土層・出土遺物及びその位置から明治以降における登山道の建設に伴う廃土と考えられる。この下位からは，山側の岩盤を削平し，谷側に土を入れることによって形成された平坦面を検出した。この平坦面は，出土遺物からは時期を限定できないものの積極的に郭跡であることを否定する資料も得られず，現段階では周辺の状況から郭跡の一部として捉えておきたい。その規模は，現地形から南北約14ｍ・東西約６ｍ・面積約80㎡と推定される。

なお，昭和61年２月24・25日の両日に文化行政課調査１係によって南峰南側斜面部で，民間放送局４社の共同テレビ中継局の建設に伴う発掘調査が実施された。調査対象面積約240㎡である。

当該地は聖通寺城跡の南端に近い位置と考えられ，掘等の遺構の遺存が期待されたのであるが調査の結果，遺構・遺物の検出を見ることは出来なかった。

以上，聖通寺城跡に関して昭和59年度より継続的に発掘調査を実施してきたのであるが，聖通寺城に係わる遺構については明らかに出来なかった。

聖通寺城跡については，戦後坂出市の川畑迪氏によって精力的な踏査が行われてきたことについては先述したが，今回の発掘調査を実施するについても貴重な助言を得ることができた。さらに資料の一部を提供いただき，ここに報告できる機会を得たことを幸いとするものである。

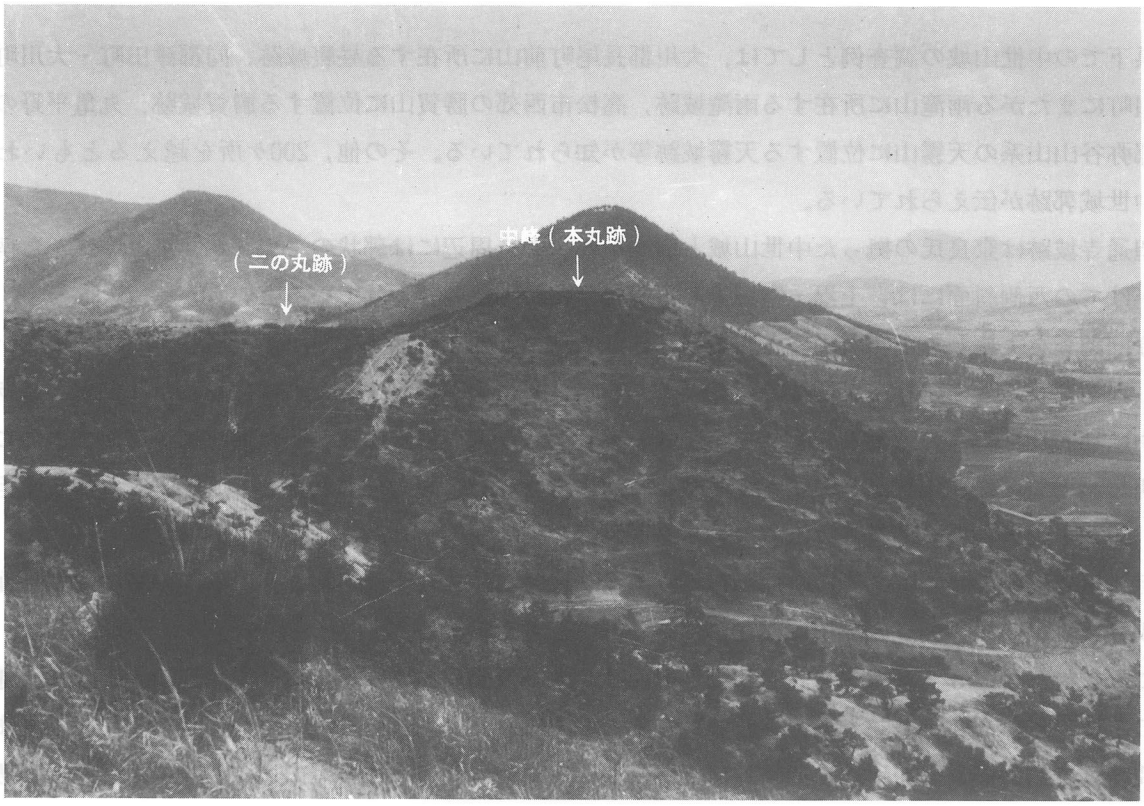
以下，順を追って説明を加えていくこととする。

第10図は，北峰より中峰（北より南を望む）を写しているが，中峰頂部の様子がよくわかる写真である。左手より中峰東側斜面にかけてはかなり大きな鞍部となり，中峰から下った東側はかなり広い平坦部が認められる。また西側斜面にも一段低い平坦部がみられる。

第11図は，中峰と南峰の間のゆるぎ岩付近から中峰を見たものである。

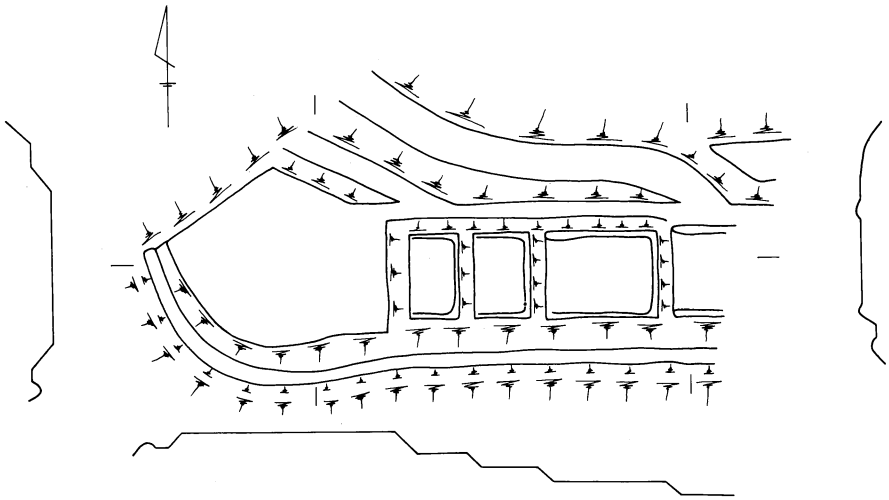
第12図は，中峰の東の平坦部から中峰を見たものであるが，西側斜面には，掘り割り状の地形を認めることができる。いずれの写真も昭和20年代後半の聖通寺山及び聖通寺城跡の姿を伝える貴重な写真で

ある。




第10図　北峰より中峰（本丸跡）を見る

第11図　二の丸跡より本丸跡を見る



第12図　聖通寺城跡・本丸跡周辺概念図

第12図は，中峰頂部から東側斜面にかけてみられる平坦部の概念図である。平坦部は三段あり，土塁・空堀状の地形が認められる。

聖通寺山は，戦後観光開発等によってその山容を大きく変え，今度は東側斜面を中心に行われる道路建設によりその姿をさらに変えようとしているが，幸いにも本丸跡と考えられる中峰周辺は比較的旧状を保ち，聖通寺城の往時の姿を知るよすがとなっている。

（安藤・坂口）

註1

「南海通記，奈良太郎兵衛元安伝」「天正十一年…郡司奈良兵衛身第1中間ヲ被取切，聖通寺ノ城ヲ保事能ハズ云々」の記事が見える。

参考文献

「勝賀城跡・Ⅱ」高松市教育委員会　1980

「讃岐天霧城を探る」一市二町天霧城跡保存会　1980

「雨滝城跡発掘調査概要」津田町・大川町・寒川町教育委員会・雨滝城跡発掘調査団　1982

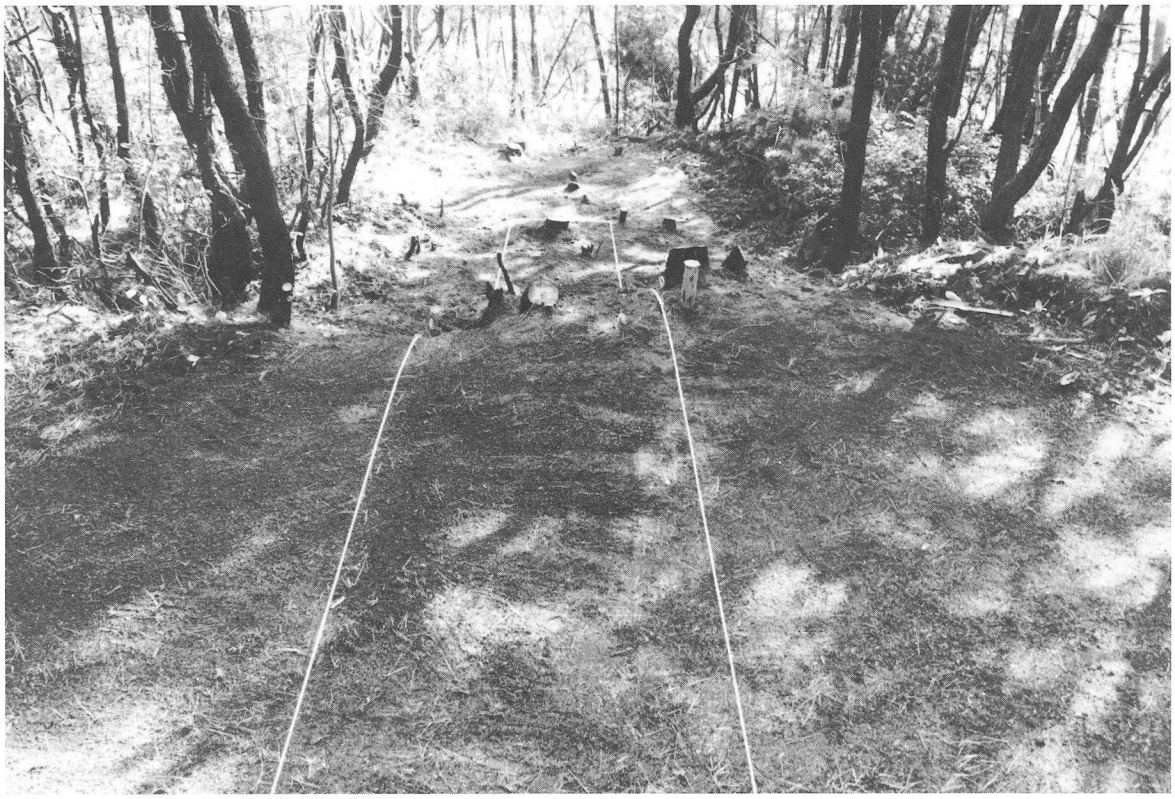
「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告（Ⅲ）」　本州四国連絡橋公団・香川県教育委員会　1985

# 図　　版

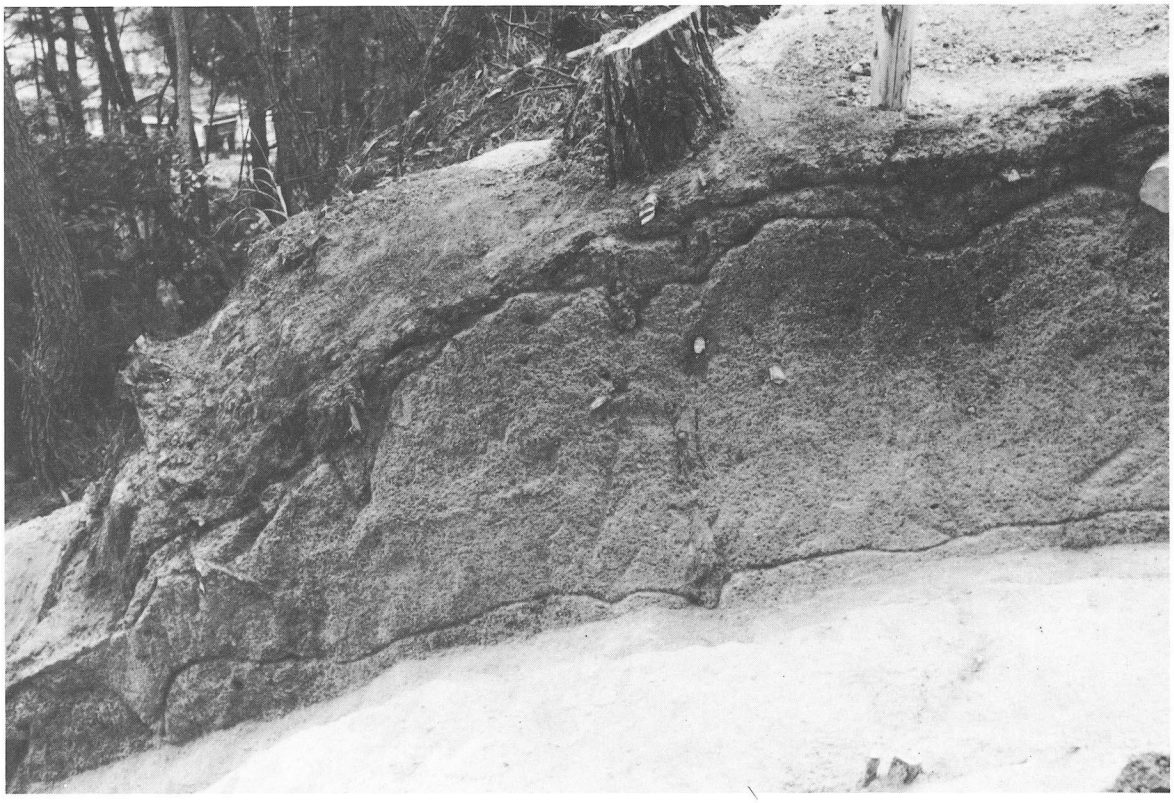
(1)　聖通寺山（昭和28年頃撮影）

(2)　第４・８トレンチ周辺地形

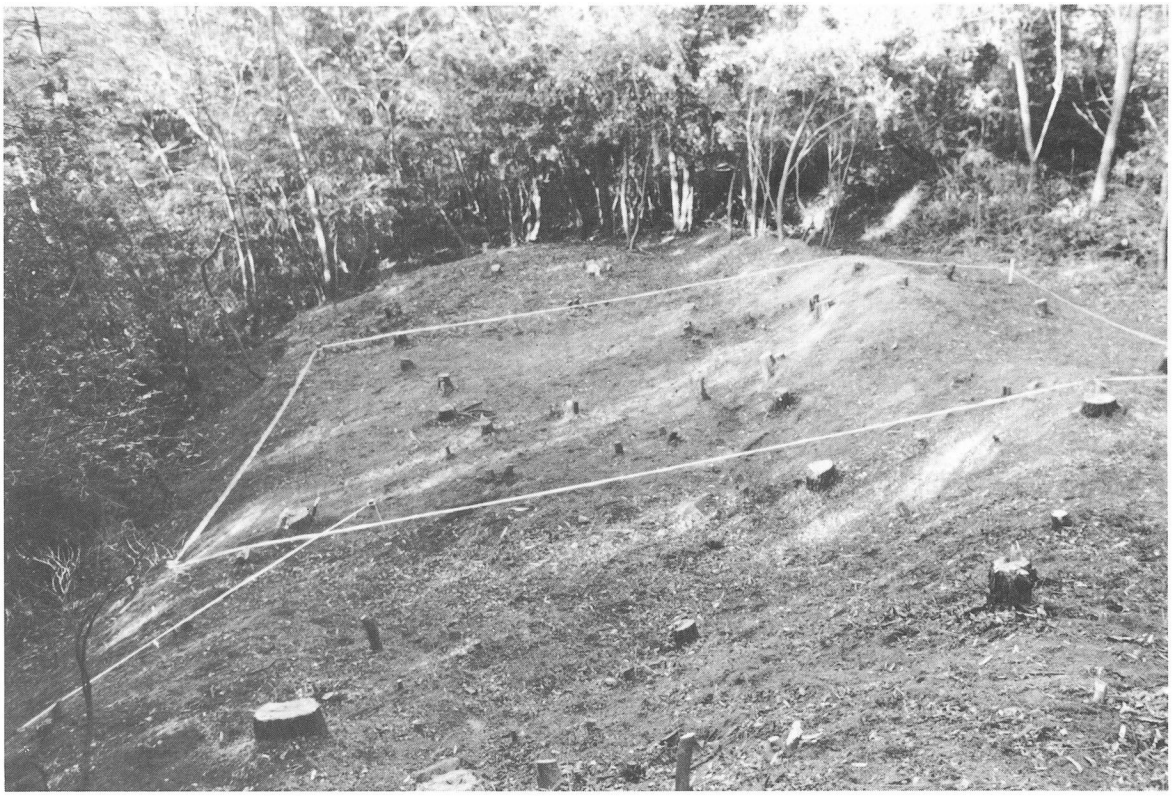
(1)　第 3 トレンチ（完掘）



(2)　第 4 トレンチ設定



(1)　第 4 トレンチ土層堆積状況



(2)　第 6 トレンチ設定

(1)　第 6 トレンチ土層堆積状況

(2)　第 7 トレンチ（完掘）

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査概報（Ⅶ）

下川津遺跡
岡宮古墳
聖通寺城跡

昭和61年3月31日

編集・発行　香川県教育委員会

印　刷　株式会社美巧社